


32歳僕が 男性 乳がんは なりました。

黒川 康敬
KUROKAWA YASUNORI

ガンによって
人生はどのように
変えられたのか。

若くして男性乳がんになった男の
ノンフィクションすったもんだブログが

電子書籍化!



実際あった
リアルなガン告知や
セカンドオピニオン、
男性だからこその
気持ちを
余すことなく掲載。

32歳僕が男性乳がんになりました。

黒川 康敬

目次

はじめに

第一章 発見からがん告知まで

乳頭部にBB弾？なにこの玉は？

都内某大学病院で初受診

皮膚科でBB弾腫瘍摘出手術

普通の乳がん治療でやるべきあれをすっ飛ばして

抜糸でとてもあやふやな告知をされる

営業マンのようなガン告知。ベルトコンベアーに乗るのを免れる

つまり僕の腫瘍は何なのか？

後から重大なことに気づく

第二章 セカンドオピニオン

電話でお祈り、ベッドで泣く

ついに兄と両親に報告。意外な反応

いきなりそんな方からお電話をいただくなんて

セカンドオピニオンの資料作りを無理矢理やってもらおう

セカンドオピニオンの結果が出るまで

人生二度目のガン宣告。何度聞いても衝撃は同じ

あのまま大学病院なら今頃は

羽田から札幌へ。いつもと違う目的の飛行

第三章 手術

遂に入院。これがまた驚きの展開(今回は良い展開笑)

検査開始。いやしかしフレンドリーですね～！

家族とともに先生と面談&術前説明
いよいよ迎えた手術当日
遂に手術!
手術終了。神様からのプレゼントをいただく
手術次の日。あれを抜くのが強烈に痛い
平気じゃん!と思ったら、謎の激痛

第四章 手術後の数年間

体の違和感
心の違和感
定期検査
ガンになって不利になること
恵み

あとがき

著者プロフィール

奥付

はじめに

はじめまして。32歳で男なのに乳がんになった黒川です。この本は僕のはじめてのKindle出版本です。2012年のガン手術直後にブログで書いた内容を再編集したものです。出版した目的は、男性でも乳がんになるということを知っていただくためです。なぜなら、僕自身男性乳がんを自分自身で発見し、すぐに処置したので超初期で済んだラッキーなケースだったのですが、多くの男性乳がん患者は腫瘍を発見してもすぐには病院に行かないので、その結果予後不良になるケースが多いからです。

「女性患者に比べ男性の乳癌は、進行した段階で診断される割合が高く、治療開始が遅いために予後不良になるケースが多い。-中略-

1990年から2007年に浸潤性乳癌と診断された146人の男性を対象に、後ろ向き研究を行った。患者の多くは、診断時に既に病気が進行した段階にあった。50%の患者にリンパ節転移が認められた。」

(日経メディカルOncologyニュース 2008/7/10 大西 淳子=医学ライター)

本文中でもどのように発見し、どのようにガン告知を受けたのかを事実のままに書いています。また、僕はセカンドオピニオンをしまして、ガン告知と手術と術後の通院病院が全部異なります。一つのケースとして参考になりましたら幸いです。そして、何よりもガンによって人生が変えられた一人の

人間として、ガンが必ずしも悪いものではないんだということを伝えられたらと思います。いつ、どのタイミングで病気になるかは私たちは分かりません。人生に突然訪れるその時のために、ガンを患うという経験をこの文章によってイメージしていただけたら少しでもお役にたてるのかなと感じています。尚、僕はクリスチャンなので、ところどころに信仰的な文章があります。その部分もつつみ隠さず書かせていただきました。ご了承いただきまして、読み進んでいただけたら感謝です。

第一章 発見からがん告知まで

第一章では、どのようにして乳がん腫瘍を発見したのか、そしてがん告知がどのようなものだったのかをお伝えします。実際の状況を忠実に文章で再現しました。

乳頭部にBB弾？なにこの玉は？

僕は時たま筋トレをやって、胸筋を膨らますことが好きです。全く無意識だったのですが、筋トレ後に胸筋を揉むのが癖（筋肉の張り具合をチェックする）だったようで、そのおかげで乳がん腫瘍を発見しました。ある日ふと胸を触っていると、コリとした感触が右胸乳頭あたりにありました。初めは乳首だと思いました。でも、あれれ、ちょっと大きいし硬いな。じっくり触って見ると、ぽこっとした膨らみが乳首の直ぐ上にあります。でもその膨らみは皮膚の中にあります。まるで大きめのBB弾が入っているよう。その玉は硬くて動きません。そして痛くありません。恐らく、サラリーマンをしていたら全く気にせず仕事をしていたでしょう。僕は奇跡的に、高校生の時に男性乳がんの存在を知っていました。そのせいか、なんとなく不安を感じ、時間もあつたので、休み明けに総合病院へ行くことにしました。当時独立仕立てで、時間もあつたということがとても幸運に感じます。男性乳がんは、そもそもその存在を知られていないこと、また痛くも痒くもないので受診が遅くなると言われているからです。

都内某大学病院で初受診

休み明け、朝一から近所の某有名大学病院へ。とても綺麗で新しい病院。多くの患者さんがひしめき合っています。初診受付へ行き、受付の女性に事情を説明しました。

「右乳頭にポコッとしたのがあるんです」

受付の女性は何科を受診させるべきか判断に迷っている様子。電話でドクターとのやり取りの末、

「まずは皮膚科へ行って下さい」

皮膚科？これは皮膚の病気なのか？？全く医療知識のない僕はそのまま皮膚科受付へ。問診票を記入し、やっとドクターとご対面。

ドクター 「う～ん。なんだろうね～」

なんだろうねって……

ドクター 「わからないな～」

わからないって!

ドクター 「問題ないと思うんだけど、気になるようだったら抽出してみましようか?そのままにしても消えるものじゃないから」

僕 「はい。事業も始めたばかりなので、余計な悩みはさっさと解決したいです」

ドクター 「分かりました。じゃ〇月〇日はどうですか？」

僕 「大丈夫です。お願いします」

こうして僕は、皮膚科でBB弾のような謎の腫瘍摘出手術を受けることになったのです。

皮膚科でBB弾腫瘍摘出手術

最初の受診から三日後、人生で初めて手術を受けることに。しかし、この時点ではまさかこのBB弾のような腫瘍が悪性とは、ドクターも僕も考えていませんでした。ドクターが言っていた「わからない」とはそういうことなんだと思います。手術室は六畳程度で、カーテンで仕切られた小さな部屋。ベッドの上に横になり、ドラマで見たことのあるグリーンの布を体にかけてられました。長めの針で右乳頭部を麻酔注射。注射が痛いといわれましたがそれほど痛くはありませんでした。意識はある状態なので、担当ドクターと会話。大学病院だからか、見習いのような30歳前後の女性ドクターが執刀。ベテランのおじさんドクターは見ながら指示を出す。

あれれ？僕は実験台か？なんとも言えない、とても悪い気分になりました。

手術は40分ほどで終了。小さな瓶の中に透明な液体。その中に半透明のBB弾のような腫瘍が見えました。やっとお目見えした謎のBB弾。傷口は一センチ程度。これなら傷口が治れば全く目立たなくていいや。そのように思いました。

ドクター 「じゃ、これを検査に出します。一週間程度で結果がでます」

そこで、次回抜糸の予約をし終了。一抹の不安を残しつつ、病院を後にしました。

普通の乳がん治療でやるべきあれを すっ飛ばして

ここまで読んで、もしかしたらお気づきの方もいらっしゃるかもしれません。僕の場合、はじめからがんの疑いがあったわけではないので、がんの検査や治療において大事なステップをすっ飛ばしています。

乳がんでは通常、視・触診、マンモグラフィ、超音波検査でがんが疑われたり、がんとの区別が必要な場合には、しこりに細い注射針を刺して細胞を吸引して調べる細胞診を行います。しかし僕の場合、男性乳がんとしてはあまりにも年齢が若いため、そのステップをすっ飛ばし、とりあえず得体のしれない腫瘍を摘出する手術をおこなったのです。もちろん、ドクターも僕自身もまさかそれが悪性であるなど想像もしなかったのです。さらに、そのドクターも乳がんのドクターではなく皮膚科のドクターです。良性腫瘍であることをほぼ確信して手術をおこなったのだと思います。

抜糸でとてもあやふやな告知をされる

数日経ち、胸の小さな傷口もだいぶ治り、予約していた抜糸の日がやってきました。検査結果はまだ先であるはずなので、とりあえず何の心の準備もしないまま病院へ向かいました。さすがは大学病院、再診はコンピューター自動受付。受信もスムーズにいきました。細いベッドに横たわり、またまた見習い中のような若い女性医師に抜糸をされました。(何度も言いますが皮膚科です)

抜糸をされている最中

僕 「検査の結果はまだですよね?どうなんですかね？」

見習いドクター 「このあと先生とご説明しますね」

な～んとなく不安がよぎる。この微妙な空気感、心理はなんとも言えません。抜糸もスムーズにいき、ようやくメインドクターとのお話。

ドクター 「検査結果が出ました」

僕 「もう出たんですか??」

ドクター 「はい」

ドクター 「ちょっと、良いものではなかったんですよ」

僕「はい」

この時は、とりあえずよくわからないが焦らず受け止めようという気持ち。
心臓バクバクですが冷静に話を聞きました。

ドクター 「もう少し大きく取る必要があるので、再度手術が必要です」

僕 「はい。先生、それはつまりガンですか？」

ドクター 「それは外科の先生が詳しく説明してくれます」

僕 「良くないということは悪性腫瘍ですよ。それってガンですよ」

ドクター 「こちらでは言えないんですよ。外科の先生が詳しく説明してくれます」

なんじゃそりゃ!

ということで、皮膚科での摘出手術、検査結果では、はっきりと乳がんであることを告知されずに終わりました。悪性腫瘍＝がんなのですが、次の乳腺外科受診まで僕はただの悪性の腫瘍でがんではない。というような意味の分からない可能性にかけてひたすら祈る毎日でした。(本当です。人は切羽詰まると不思議な思考になりますね。がんじゃないよね??と心休まる時がありませんでした。)

営業マンのようなガン告知。ベルトコンベアーに乗るのを免れる

皮膚科でプチ告知をもらったその日に、乳腺外科の予約を入れました。生きた心地のしない一週間を過ごし、ようやく乳腺外科の予約日になりました。今回は乳腺外科。周りはもちろん女性ばかり。でも、ある意味ガンかもしれないという状況において、僕の心はそんなの関係ありませんでした。全く気になりませんでした。むしろ、不安で頭がいっぱい。実はこの日まで両親にも兄にもこのことを話していませんでした。心配を掛けたくないからです。完璧に乳がんであることが確定したら話そうと思っていました。診察室の前で呼ばれるのを待つこの時間の長いこと。10分ほどが過ぎた時、一人のナースが僕に声をかけてきました。

ナース 「黒川さんですか？検査始めようと思うのですが、先生とお話しされますか？」

僕「え？ は、はい。話したいです」

いやいやいや、むしろ今日は話を聞きに来たんですが!いきなり検査ってなんの検査ですか???検査(病理検査)の結果を聞きに来たんですよ!

ナース 「分かりました。ではもう少々お待ち下さい」

後にその検査が何の検査かを知ることになります。更に10分程待つて、

「黒川さ～ん」

呼ばれた!

心臓バクバク。表面は冷静でも心臓バクバク。鼓動が聞こえる。

入室

目の前に若い感じのドクター。既に顔が深刻。第一印象が「深刻」ですよ。患者にとってはめちゃくちゃ恐怖ですよその表情は。

ドクター 「皮膚科の先生からはなんと聞いてますか？」

僕 「腫瘍が良いものではないから、もう少し大きく取る必要があると言われました」

ドクター「そうですか」

ここからはまるでドラマの様な展開に.....

ドクター 「黒川さん、ご家族構成を教えてくださいませんか？」

僕 返答

ドクター 「ご家族は近くにいらっしゃいますか？」

僕 返答

ドクター 「お仕事は何をされていますか？」

僕 返答

ドクター 「お仕事休むことができますか？」

僕 返答

って、なんの尋問やねん!こんなにジラされたのは人生初です。分かりますか?この時間も、まだガンという告知がされていないんですよ。先に結論くれって感じです。こっちは心臓バクバクですよ。不安は徐々に頂点に達していきます。質問をされるたびに心臓がはちきれそう。

つまり僕の腫瘍は何なのか？

合計で10個以上の質問に答えました。とにかく僕の状況を確認する内容。未だ告知はされていません。ドクターの顔は深刻そのもの。

ドクター おもむろに白い紙をデスクの上に置く。そしてペンを取り何かを説明し始めた。

ドクター「男性には20万人に一人です」

ドクター 「乳がんです。通常男性ですと60才以上の方が多いです。黒川さんの年齢は非常に珍しいです」

キター!ドラマのようなガン告知〜!あ〜、ガン告知ってこんな感じなんだ〜。ハンマーで後頭部を殴られた感じ〜。ものすごい衝撃、絶望。あ、自分は死んじゃうんだ。

が〜〜ん!

まさにダジャレのような気分になりました。が〜んって感じです。いま目の前の事実が全く信じられません。でも表面はあくまで冷静を保っています。心の中はパニック状態。ここからドクターの不安増幅説明が始まりました。

ドクター 紙に胸の絵を書く

ドクター 「ここをこのように切り取ります。胸は術後凹んでしまいます。リンパ節を全て取り、転移の状況も調べるので脇にも傷が残ります」

つまり、右胸は胸筋を含む全摘、リンパ節も全摘で摘出後検査をするとのこと。胸は男性だからまだいいか。でも、へこむのはさすがに抵抗あるな～。だって、筋トレで胸筋が膨らむのが良かったし、男ならバッキバキに鍛えたいのに、片側へこむのか。心もへこむな。

間髪入れずに

ドクター 「どこの病院に行っても同じことを言われます。一応手術予約入れておきました。どうしますか？」

デスクのPC画面にはカレンダーが表示されている。そこには確かに予約らしき表示。

僕 「まだちょっと判断出来ないので、手術の予約はしません」断言

ドクター 「そうですか。今予約しないと次は三ヶ月以上先になってしまいますがいいですか？」

僕 「はい」

だからいいって言ってるじゃん。なんで焦らせるの。

ドクター 「じゃ、消しちゃいますね」

目の前で手術予約を消していく。別に目の前で消さなくても良くないですか。患者を何だと思っているんですか。まるで悪徳訪問販売の営業マンのような対応です。

ドクター 「がんセンター等専門の病院に行っても同じことを言われますよ」

それはさっき聞きました!

ドクター 「じゃ、検査の予約も消しちゃいますね」

え？検査はやりたいですよ。って、そもそもなんの検査???調べられるなら何でもいいから調べてほしい。

僕 「検査したいです。検査はなんの検査ですか？」

ドクター 「検査は、手術をするための検査です。手術をすることが前提の検査なので、手術をしなければ検査出来ないんです」

僕 「あ、そうなんですね」

ドクター 「はい。なので消しちゃいますね」

またもやPCの画面に映されたカレンダーから検査の予約を消していく。このあたりから僕はそのドクターに不信感。特に、僕を人間だと思って接していない感じ。そこに愛は微塵も感じませんでした。とにかく、すべての段取りが決まっていて、それをそつなくこなしている様子。まるでロボットのよう。でも、僕は患者。乳がんに関して何の知識もない。もしかしたら死んじゃうかもしれない。本当に予約しなくていいのか？そのような葛藤もありました。

僕 「ひとまず考えますので、予約は大丈夫です」

ドクター 「分かりました。では、次の予約は入れません」

不安でいっぱいな僕は少しでも不安を取りたくて、ドクターに最後の質問をしました。極限に追い込まれた僕の精一杯の確認でした。

僕 「先生、ガンですけど、すぐに死ぬことはありませんよね」

ドクター 「たぶん」

はあ!?なに!たぶんって!この状況で医者であるあなたが「たぶん」って!
確かに僕の質問も担当直入すぎますが、さすがに心無いんじゃないです
か???

さすがにそれはまずいと思ったのか、慌てて補足を加えるドクター

ドクター 「たぶんというのはね、30代の方で一人だけ男性乳がんを治療したことがあります。その方は手術して投薬治療して、5年経ったいまでも問題なく暮らしています」

と、過去の実績を見た場合に、まだ5年生きている人がいますということだけお伝えいただきました。

ガンが確定。胸も全摘。失意のどん底を表面ではひた隠し、あくまで冷静を装いながら帰宅しました。

後から重大なことに気づく

ちょっと待てよ。ふと気付きました。告知前の待合室でナースに言われたこと

ナース 「検査始めますが、先生とお話ししたいですか？」

この検査とはつまり、手術をするための検査だったということです。僕がもしあの時「はい」と言っていたら、勝手に手術のための検査をされていたのです。だって、確かに手術のスケジュールは入れられていた。そして、手術の検査を行う予定だった。これは患者に何の説明もせずに手術をしようとしたのか、皮膚科のドクターとの連携が全くなっていないのか、はたまた他の要因があるのか。大学病院にあってはならないこと、もしくは大学病院あるあるなのか。この件に関しては今も謎のままです。ガン告知をまともにせ

ずに手術検査を行うなんてありえません。結果、僕はこの件があって余計に不信感が募ってしまいました。

第二章 セカンドオピニオン

人生初で最後であってほしい乳がん告知はこんな感じでした。がんを宣告されるだけでかなりの精神的ダメージですが、どうしても最初の病院と医師に信頼をおけなかった僕は最終的にセカンドオピニオンをすることになります。それまでのことを引き続きお読みください。

電話でお祈り、ベッドで泣く

僕はプロテスタントのクリスチャンです。当時は成功を夢見て独立後に失敗し、5年間の放蕩から教会に戻ったばかりでした。教会にはには信頼出来る友人が沢山います。クリスチャンは、クリスチャン同士でお互いをお祈りし合ったり、今困難にいる人たちのためにみんなでお祈りしたりします。僕は、教会でも一番信頼している友人にガンのことを伝えました。友人もショックを受けている様子。まさか、ただの腫瘍がガンだなんて誰も想像しません。僕は必死に涙をこらえ、電話口で事の流れを伝えました。友人も身近な人をガンで亡くしていて、ガン治療などの書籍も多数読んでいるとのこと。色々なアドバイスをもらいました。最後は電話口でお祈りしてくれました。僕だけにしてくれるお祈り。神様はなぜ僕にガンを与えたのだろう。こらえていた涙がどっと溢れました。まだまだ生きていたい。やるべきことがたくさんあるのに。この時は本当に直ぐにでも死んでしまうのではないか？そんな不安でいっぱいだったのです。お金も底を尽き、引っ越したシェアハウスの狭い部屋のベッドで、毎晩泣きながらお祈りをして過ごしました。

ついに兄と両親に報告。意外な反応

乳がんが確定した。32歳の男、本当に「まさか」でした。ガンが確定した以上、家族に伝えなければいけません。本当はずっと内緒で治療しようかと思っていました。でも、告知があんな感じだったので、どうしても相談したかった。僕の母親は普通の人のお百倍心配性。よって、母親に情報が行く前に準備をしました。まずは兄に電話。僕は出来るだけ明るく、軽い感じで報告しました。

僕 「俺、男なのに乳がんになったわ」

兄 「乳がん??男にもあるの??」

僕 「うん」

「おかんがショック受けないように、報告する前に準備しようと思ってる。
だからまだ親には話してないからね」

兄 「分かった」

超多忙な兄。簡単に報告して電話を切りました。クールな兄も多分結構な
衝撃を受けたのではないかな？やっぱり、男にも乳がんがあるなんて知ら
なかったよね。

続いて母親の前に父親に電話。

僕 事の経緯を父親に伝える。

僕 「そういうことだから、親父が家に帰ったら連絡ちょうだい。そしたら俺がおかんに電話するから。親父がそばにいたほうがいいと思うんだ」

父親 「うんわかった。じゃ、家に着いたら連絡するからね」

数時間後、父親から着信

父親 「今からすぐ帰るから、今電話してみて。着いてからだと不自然だと思うんだ」

さすが父。自然な流れで家に到着し、そこで僕がガンであることを知った母親とご対面という流れ。よし!段取りはバッチリだね!

遂にきた。母親に(僕の)乳がん告白。僕の予想では、母親が取り乱して絶叫すると思っていました。だから、どんなふうに、どんな順番で話しをするかととても悩みました。

携帯を手に取り、コールボタンを押す。

ちゃんと親父戻ってくれるかな??

コールが鳴る。

母親 「はい〜!」

いつもの元気な母親の声。このテンションからガン告白にもっていかねば。
僕はできる限り明るい感じで、軽い感じで母親に結論から伝えた。

僕 「おかん、あのさ、俺、乳がんになったんだよね」

母親 「うん？乳がん？」

あれ??反応が予想とちゃうぞ。

僕「うん」

これまでの経緯を説明。

母親 「だったら、こっちに乳がんで有名な先生いるから聞いてみようか？」

どうやら、母親が通院している外科の先生が乳がんで有名ならしい。僕は、あんな告知を受けていたものだから、母親が既に知っていて、信頼もしている先生から乳がんについてもう一度説明を聞いたかった。すぐに死ぬ可能性がなくもないという事をドクターから伝えられていたものだから、藁をも掴む思いでした。

母親 「乳がんは大丈夫だ。お母さんも乳がんになったらその先生にお願いしようと思っていたから」

予想に反して、母親は全く心配していない様子。(実際は心配しているのでしょう)

僕に心配かけないように、あくまで冷静に対応してくれました。ひとまず、僕が乳がんであることが家族に伝わりました。母親がその有名な先生に私の

ことを話してくれるということで、電話を切りました。

いきなりそんな方からお電話をいただくなんて

母が早速その有名乳腺外科の先生に電話をしてくれました。

僕が男性乳がんになる

母が有名な乳腺外科の先生を知っている

凄く恵まれた状況でした。母親に電話でガン告白をしたその日、まさかとは思ったのですが、その乳腺外科の有名な先生から直接私にお電話がありました。とてもとても多忙な中、東京の一人の青年のためだけに貴重な時間を使って親身に話を聞いてくださるドクターもいらっしゃるんですね！それまでのことがあったので、それは驚きと感動でした。

有名ドクター 「黒川さん、あのね、乳がんでもね、あなたのような年齢は非常に珍しいの。だからもう一度病理検査をしてもらうといいと思うよ」

僕「はい」

有名ドクター 「結構あるんだよ。ガンと宣告されて、実際はガンじゃないことが」

僕「え～!そんなことあるんですか???

だよね!だよね!32歳の男が乳がんになるわけないもんね!やっぱりそ
うじゃん!

有名ドクター 「うん!だから、まずは検査をした病院に行って、セカンドオ
ピニオンのための資料を作ってもらって、うちに送って下さい」

僕「分かりました!すぐに手配して送ります。宜しくお願いします!」

暗闇の中に、再び光がさした気持ちでした。もしかしたらガンじゃないかもしれない。神様、良性の腫瘍でありますように!早速検査をした病院にセカンドオピニオンのための資料を請求することにしました。

セカンドオピニオンの資料作りを無理矢理やってもらおう

次の日、僕は早速検査をした大学病院へ電話をしました。直接乳腺外科に電話をし、単刀直入に「セカンドオピニオン用の資料を作ってください」と伝えました。

※実際にはプレパレート等具体的な必要物が有名ドクターより指定されており、それを伝えています。

僕 「出来るだけ早く欲しいのですが」

受付 「通常一週間前後頂いています」

僕 「明後日には欲しいです。なるべく早く欲しいです。どうにかありませんか？」

受付 「ちょっとむずかしいです」

僕 「いつなら可能ですか？」

受付 「では、ドクターに確認しますので、また折り返しお電話します」

僕 「よろしく願いします」

数時間後

大学病院からの着信

受付 「黒川さん、先生特別に作成してくれるそうです」

特別とは!ありがとうございます!

僕 「ありがとうございます」

受付 「金曜日には作成出来ると思うのですが、出来上がりましたら再度こちらからご連絡します」

その後、約束通り金曜日にセカンドオピニオン用の資料を手にすることが出来、航空便で有名ドクターの元へ送ったのでした。

セカンドオピニオンの結果が出るまで

中途半端過ぎます。一度はガンであることを告知されながら、もしかしたらガンではないかもというアドバイスからのセカンドオピニオン申請。この間「大丈夫ガンじゃない」という自分もいれば「ガンだったらどうしよう」という自分もいます。この気持ちが行ったり来たり。この時点で、未だに自分がそんな当選確率の低い病になるなんて受け入れられないでいたのです。待っている期間中毎日、電車で40分掛けて教会まで行き、祈りました。祈りの最中止めどなくあふれる涙。

「感謝します。このような試練を与えて頂きありがとうございます」

「目的があり、意図があり、愛ゆえに試練を与えてくださることを信じます」

「どうかこの試練の後に、豊かな祝福がありますように」

「ガンでなかったら嬉しいです。でもすべてをあなたに委ねます。あなたに失敗はありませんから」

僕は人に会うことの多いお仕事です。キャラクターは明るくいつも笑顔です。毎日お祈りをする事で、不安を全部神様に託した感じがします。だから、仕事も支障なく行うことができました。

人生二度目のガン宣告。何度聞いても衝撃は同じ

予定では、有名ドクターに届いたセカンドオピニオン資料は、そこから病理の先生へ転送されるはずでした。しかし、到着早々に突然有名ドクターから着信がありました。

僕 「はい、黒川です」

食事中に電話が来たもんだから、幸せな気分から一気に血の気が引く。心臓がバクバク。こんなに人はすぐに変化するものか。

有名ドクター 「あ～黒川さん。私見たんだけどね、これは間違いなくガンだわ」

優しい口調、でも断定的にしっかりと伝えていただきました。

有名ドクター 「私の目から見ても明らかにガンだから、病理検査はなしにしますね」

僕 「ガンですか……」ガーン

有名ドクター 「手術はどうしますか？そちらでしますか？」

僕 「先生、もう、こちらの先生には信頼が無いんです。遠くてもいいので先生にお世話になりたいです。お願いできませんか」

ドクター 「大丈夫ですか？こちらまで来るの大変ではないですか？」

僕 「ありがとうございます。でも先生、もうこちらの先生は信頼できません。お願いします」

ドクター 「分かりました。ではなるべく早く出来るようにベッドの調整しますから。男性だから個室がいいもんね」

僕 「ありがとうございます。よろしく申し上げます」

電話をするだけで不思議と安心してしまう話し方。嘘のない、そして患者想いの先生。電話だけでこれだけ信頼出来ることもなかなかありません。人はやっぱり人ですから、「なんとなく」の感覚はある程度当たる気がします。なんとなく「やばい」、なんとなく「いい」。僕は僕が感じたとおりに、そして神様が用意してくれた流れに任せて、その有名ドクターから手術を受けることにしました。

あのまま大学病院なら今頃は

早速次の日、有名ドクター(院長先生)から直接連絡をいただきました。

有名ドクター 「ベッドの調整が出来ます。来週はどうですか?来ること可能ですか？」

僕 「はい!大丈夫です。行きます。ありがとうございます」

有名ドクター 「じゃあ、〇日に入院して手術のための検査をしましょう。そして、次の日の〇日に手術しましょう。多分その日最後の手術になると思う

んです。午後七時頃になると思います。シャワー付きの個室が三日間使えないんですけど、その後は使えますから、それまではシャワー無いんですけど大丈夫ですか？」

僕 「大丈夫です。ありがとうございます」

どうやら、男性は基本的に個室らしく、ちょうど僕が入院するときに他の男性患者さんがいるらしい。

有名ドクター 「手術の時に麻酔で寝ちゃうから、寝て起きたら朝ですよ。その方がいいかもしれませんね」

有名ドクター 「入院当日の夜にご両親と一緒に説明を受けて下さい。全てお伝えして、どんな治療方法をするかお見せします。質問があればその時全て答えますからね」

僕 「はい、宜しくお願いします！」

僕は大学病院の説明とのギャップに驚いた。病院やドクターによってこんなにも変わるものか。あのまま大学病院で決断をせず、再度手術を申し込んでいたら、手術は早くても三ヶ月後。その間ずっと悩み続けたでしょう。そして恐らくろくな説明も受けないまま胸筋をも失い、リンパ節切除の後遺症も大きなものとなったのでしょう。患者の私たちは信じる、信頼するしかあ

りませんが、ドクターを選ぶということは自分の身体を守るために必要なことだと身をもって経験しました。決して大学病院がだめとかいうことではなく、患者もきちんと自立する必要があるということ、そしてクリスチャンであれば、主に信頼して導きを求めていくことが大切だと感じました。

羽田から札幌へ。いつもと違う目的の飛行

セカンドオピニオンから早々に入院、手術日が確定しました。本当にありがたい対応。札幌へ発つ前に、教会のみんなに祈ってもらいました。どれだけ神様に委ねてもやっぱり心は不安でいっぱい。みんなのお祈りがとても力になりました。僕は前職が採用のお仕事だったので、よく飛行機で出張していました。羽田-新千歳は行き慣れた区間。でも、今回ばかりはこれまでと違う目的。常に気が張っている感じでした。少しでも気を紛らわすのに、搭乗ゲート直前にあるスタバで大好きなキャラメルマキアートを購入。フライト中はずっとお祈りしていました。翌日には早速入院だったので、札幌到着後もおとなしく過ごす一日でした。

第三章 手術

遂に人生初の手術を迎えることとなりました。32歳の男が胸の手術を受けるなんて。それが自分だなんて。でも現実にそれがあったのです。手術前後のお話を引き続きお読みください。

遂に入院。これがまた驚きの展開(今回は良い展開笑)

いきなりですが、とても良い先生と病院に巡りあいました。入院当日、午前11時に病院へ。なんと、病院の建物がかわいいピンク色。

「ああ、やっぱりね……」

ちょっと恥ずかしさが出てくる。人間、こんな状況でもこんな心境になるのかと驚き。初めの告知の時は全くそんなの気にならなかったのに。でも、これはむしろ自分の心にその余裕が出てきたってこと？

受付へ行くと、たくさんの患者さん。もちろん全員女性です。男性は僕一人。

僕は一人だけキャリーバッグをコロコロさせて行きました。まさかこの僕が患者だとは誰も思わなかったでしょう。一応シャツにジャケットを着ていたので、製薬会社の営業マンとでも思ってくれたらいいな～なんて思いました。病院も配慮して下さい、程なく僕はそのまま入院部屋へ。ここでも看護師さんに

「シャワー付きのところが空いたら移動できるので、それまでこちらで我慢して下さいね」

と、温かいお言葉。もちろん!というより、素晴らしく綺麗でまるでホテルの部屋でした。ほとんどが女性の患者さんでしょうから、女性を意識したので

しょう。こんな良い場所に入院していいの？って感じです。僕は当時ガン患者だったわけですが、とはいっても肉体は普通の人と全く変わらないんです。ただ胸に腫瘍があるだけでほかは何も変わらないんです。僕は病人になるのが嫌、というより自分が病人のように振る舞ってはいけないと思っていたので、入院の部屋なのですが、デスクでパソコンをカチカチやっていた。病院という場所、病人が着る服、ベッド……この雰囲気には飲まれてはいけないと決めていました。

お昼過ぎ、ようやく検査が始まりました。

検査開始。いやしかしフレンドリーですね〜!

僕は以前、サービス業の新卒採用をしていました。北海道は全国でもサービスレベルが高い地方と認識しています。それは北海道民気質なのかもしれません。まさか病院でもそれを実感するとは。

お昼過ぎ、ようやく手術の為の検査が始まりました。もちろん看護師さんも全員女性。建物内にはほとんど女性しかいないのです。だから常にちょっとだけ恥ずかしいのです。でも、そんなのを吹き飛ばすフランク&フレンドリーな看護師さんの対応に感謝でした。手術前検査は主に血液検査、尿検査、心電図、呼吸機能検査、CT、MRIなど色々です。たくさんやったのでどれがどれか分かりません。上記の検査でも、最も印象的だったのは呼吸機能検査です。コンビニのレジくらいのマシンに、掃除機のパイプのようなものがつながっているものです。そのパイプの先端を口に含み、息を思いっきり吸ったり吐いたりします。この検査をしてくれた看護師さんが

「頑張って頑張って～」

「もっともっと～」

「わあ～、凄いですね～！」

と、めちゃくちゃ褒めてくれるんです。しかも可愛い。そんなほめられたら惚れてまうやろ～!って感じでした。(余談です)

でも、そんなことを思いながら、あ、自分まだまだ余裕あるな!

って思いました。病院全体のチーム体制というか、院長先生の方針というか、とにかく全体的に良い雰囲気全開の病院でした。だから患者側もとても安心できました。ドクターの雰囲気、看護師の雰囲気、受付の雰囲気、これは患者側にもすごく影響することなのだと感じました。とても良い雰囲気の安心、信頼できる雰囲気、検査後はより安定した状態で先生との面談を待つことができたのです。

家族とともに先生と面談&術前説明

術前検査が終了し、その日の夜、遂に先生からしっかり説明を受けることができました。インターネットでお顔を拝見し、何度も電話をくださった院長先生。実際会っても、その人柄がにじみ出ています。とにかく0から100まで徹底的に説明いただきました。その中でも救われたことは、今回の手術は『胸筋温存手術』(きょうきんおんぞんしゅじゅつ)であり、胸筋を残せるということ。そして、リンパ節への転移を調べる方法として、『センチネルリンパ節生検』を行うことにより、術中に転移状況を調べ、必要最低限のリンパ節切除で済むということ。大学病院では、胸筋全摘と腋窩リンパ節郭清を言われていただけにラッキー!という感じです。転移がなければ良いのですが、この時点ではまだ何もわからない状態で不安でした。ただ、やっぱり僕はセカンドオピニオンをしてよかったと思いました。自分で自分の身体を守りました!いや、神様が導いてくださった方法によってなされました!

いよいよ迎えた手術当日

先生より詳しい説明を受けた翌日、ついに手術当日を迎えました。

一日4回行われる手術で、その日最後の回が僕の手術。人生で初めての手術。でも、それほど緊張はしませんでした。もうすべてを委ねていたのです。手術の時間までずっとパソコンの前で仕事をしていました。たまに聖書を開いたり、本を読んだりして心を落ち着かせていました。手術の一時間前に両親が到着しました。今回連絡しなければ、この手術ですら一人で受けようと思っていたのですが、やっぱりいてくれて良かったです。30歳を超えても親は親だなと感じます。当時は私も独身でしたので、この時ばかりは甘えさせてもらいました。

手術の10分前、ついに看護師さんが部屋へ来ました。手術の為に、手術用の服に着替えるのですが、その服の中はT字帯と呼ばれるふんどしのようなものだけを履く形になります。ちょっと恥ずかしいけど、むしろそのあと手術ですからさすがに余裕は残っていませんでした。手術が初めてですから、全身麻酔も初めてで、全身麻酔がどんなものか不安でした。でも寝ている

だけで終わるのだからいいよね。と自分に言い聞かせて緊張をほぐしていました。

遂に手術室に移動です。点滴をしていたので、点滴が吊るされているハンガーを引きずりながら手術室へ移動。すでに先生と看護師さんがスタンバイしていました。

ドラマで見たことのある手術室。いよいよこの時が来ました。

遂に手術！

凄く広い部屋に小さなベッド、上には大きな照明。既に色々な機械や道具が揃っている。看護師さんが二人、執刀する先生が一人と思いきや、後から院長先生が登場。隣の部屋から自動ドアが開き、登場した先生はスーパーヒーローのようでした。

上着を脱ぎ、手術ベッドへ仰向けに寝る。

点滴が手術用のものと交換される。

脈を測るために足先に何か付けられた。

緊張感があるものの、とても和やかな雰囲気。

安心感があり、温もりがある手術室。

看護師さんとドクターの信頼関係もできているのが感じられ、不安は一切ありませんでした。でもちょっぴり緊張しました。間もなくあの全身麻酔。僕は目をつぶりながら神様に祈りました。

神様、全てをあなたに委ねます。どのような結果も受け入れます。ありがとうございます。

全ての準備が整い、いよいよ全身麻酔が入れられる。

点滴のバイパスから、看護師さんが接続。

パイプの中に麻酔薬が入った。

看護師さん 「じゃ、おやすみなさ〜い。」

ドクター 「黒川さん、一分くらいで眠くなりますからね～」

僕 「はい」

あれ？眠くならない。でも、1分くらいって言ってたし。まだかな？目をつぶっているが、まだドクターたちの会話が聞こえる。どんな感じで眠くなるのだろうか？と思っていたその時、一気にずっと眠りについたのでした。徐々に眠くなるというよりは、一瞬で眠りに付く感じでした。今でも眠りに入る直前まではっきりと記憶しています。

こうして、32歳の男性である僕の、約二時間に及ぶ乳がん手術が始まったのです。右の乳頭とはもうこれでバイバイ。いままでありがとう。

手術終了。神様からのプレゼントを
いただく

「お〜い!」

「康敬〜」(名前を呼ばれる)

「お〜い!」

.....

意識がもうろうとしながら少し目を開ける。

ライトが眩しい。目の前には両親の腰が見える。でも、ものすごくもうろうとしている。そして強烈に眠い。

あ、手術終わったんだ。

本当にドラマのような手術からの目覚めでした。一瞬だけ目覚めた僕に伝えられた神様のプレゼント。

母親 「康敬、転移無かったって。もう取ったからね」

センチネルリンパ節生検のお陰で、手術中にリンパへの転移状況を確認いただいた。僕のリンパには転移がなかった。

僕 「アーメン。神様感謝します」

僕はそれだけと言って、また深い眠りにつきました。夢などは見なかった気がします。でもこの時すでに、僕は男性乳がんを伝えるために、また、がんで苦しむ人のために、今健康な人のために使命が与えられた。そう確信していました。

二度のガン宣告。セカンドオピニオンからの胸筋温存手術。そして手術成功、転移なし。大きな使命。半月の間にどん底と最高の幸せを手に入れました。

手術次の日。あれを抜くのが強烈に痛い

手術が夜だったので、そのまま朝まで眠りにつきました。夜中何度も看護師さんが来てくれました。僕には点滴と、尿を自動で外に出すためのパイプと、リンパにたまる液を自動で外に出すためのパイプがつながっていました。朝5時頃、もの凄い尿意があり、でもパイプで繋がっていて身動きが取れないので、看護師さんに頼んで尿を出すパイプを引きぬいていただきました。経験した方はご存知だと思いますが、「ウォ～」と、うなるほど痛かったです。激痛です。なにせ、膀胱の奥までパイプが入っていますから。なんだかんだで今回の一連の処置で一番痛かったのがこれです。

夜が明け、朝ごはんは確か無かった気がします。昼ごはんから、おかゆが出ました。リンパの液を自分で出せるように教えてもらい、自分で移動できるようになりました。やはり男性で、傷口が小さいので回復が早かったと思います。僕自身、全身麻酔が必要な手術の次の日に、自分で動いてトイレに行ったり移動できたりするとは思っていませんでした。右胸と右脇の下にはガーゼがはられており、当分は動かさないようにしなければいけませんでした。術後の痛みも、痛み止めの効果もありますがそれほど気になりませんでした。とにかく病人のようになりたくなかったので、手術2日目にはベッドから起き、出来るだけ座って過ごすことにしました。親からは術後だから休むように言われましたが、病院のベッドで横になる行為が、自分は

病気になっているということを認識させるような気がしたので、座って読書をしたりテレビを見たりしました。今までと違うことは、左手に点滴が付いて、右手は術後で上げられないことくらい。それ以外はいたって健康な普通の人なのです。

抗生物質を3日間服用し、通常退院まで約1週間かかるところを、たった3日で退院許可が下りました。これは、僕が男性で傷口が小さかったからです。右胸、脇の下共に5センチ程度の傷です。3日目にはパソコンも使え、仕事を始めることが出来ました。

その時初めてFacebookで男性乳がん手術をしたことを投稿しました。この投稿の後に退院したのですが、まだリンパに溜まる液が排出されるパイプは繋がれていて、定期的に自分で溜まった液を捨てなければなりません。歩くときも、右手が振れないのでなんだかぎこちない感じ。早く普通に戻りたい!そんな思いが強かったです。

平気じゃん!と思ったら、謎の激痛

退院後数日が経過し、シャワーも浴びられるようになりました。傷口にはテープを半年間ほど貼らなければいけません。これは、傷口が膨らまないようにするためです。男性で良かった。傷口が小さいから回復も早い。と思ったのは数日で終わりました。手術から一週間が経った頃から、傷口ではない部分に激痛が走りだしたのです。手術箇所は右乳頭部分。しかし、激痛が走りだしたのは右胸の胸筋部分。傷口のちょっと上の周辺全体です。痛さの種類としては、ヒリヒリ〜!しかも強烈なヒリヒリです。火傷したかのような、皮を一枚剥がされたかのような強烈なヒリヒリ感。しかも場所が傷口から少し離れたところで、本当に謎でした。歩いているとシャツが触れると「う〜!!」と立ち止まってしまうほど。傷口の痛みが飛ぶってことはなんとなく聞いたことがあるけれど、インターネットでも確信になる情報が見つからずちょっと悩みました。手術後だからこれくらいは起こるよね?そう励ましつつ、でもやっぱり不安もある日々でした。なにせ、傷口と違う部分が痛むのですから、またおかしい病にかかったのかと思いました。更に、リンパ節を少し切除した影響で、脇の下の外側に感覚がありません。触っているのに触れている感覚が無い。あ、僕のこれは治らないんだ。しかも、脇を触ると右腕全体に鳥肌がバーっとたつ。何度触っても鳥肌が立って気持ち悪い。神経がちょっとやられたんだね。結局日常生活に支障はないので気にせずいたら、いずれ全く気にならなくなりました。

第四章 手術後の数年間

手術以外の治療は投薬のみとなりました。それから数年間の僕の様子をお伝えします。

体の違和感

手術が終わり数ヶ月すると元の体に完全に戻った感じでした。しかし、時々手術の影響を感じる場面があります。まず、胸の傷口の痛みはちょっとだけ残っていて、恐らくこの痛みは一生取れないのだと思います。Tシャツがこすれると痛かったり、普通に手で触れると痛いのです。だから基本的に傷口にはさわりません。高校時代にやっていた空手をもう一度やりたいと思ったことがありましたが、傷口に攻撃を受けたら傷口が裂けてしまうと思うのでそれは諦めました。また、脇の下(リンパ)は日常なんの支障もないのですが、時々かゆくなります。しかし、かくと感覚が無いのでなんとも言葉で言い表せない違和感があります。かきたいのにかきたくないという気持ちです。人間はかゆければかくという行動を無意識にしています。その無意識でしている行動が無意識でできなくなるという支障ができました。それでも、僕の場合は全摘の方に比べれば軽いものだと思います。

心の違和感

僕がガン告知を受けたときにまず感じたことは「死んじゃう」でした。それは、多くのメディアがガン=死を連想させるからです。ガンになったら死ぬというロジックが僕の中にできていました。実際自分がガンになってみていると調べると、ガンはすぐに死ぬことはないということが分かりました。ただ、ガンになって以降、日常生活をしていて「ガン」という言葉を聞くとドキッとします。5年が経過して少しずつそのドキドキ具合が小さくなっていますが、やっぱり心のどこかで「ガン」と言うことばを気にしているのだと思います。それまでは他人事だった単語が、今は自分事の単語として認識しているのです。これは同じくガンを患っている方の気持ちを少しでも理解できるようになったとも言えると思います。超初期とはいえ、ガンはガン。そして、男なのに乳がん。この経験はしようと思ってできることではありません。ガンという言葉にガンとならずに、そこにも希望を見出していこうと思います。

定期検査

東京に戻ってからは、札幌のドクターに紹介されたこれまた素晴らしいクリニックの先生に定期検査でお世話になりました。月に1度の検査が、3ヶ月に1度になり、半年に1度になり少しずつ間の期間が伸びていきました。僕は抗がん剤や放射線治療は不要で、ホルモンを調節するホルモン剤を飲み続ける経過観察となりました。乳がんの定期検査ですので、もちろん乳がん専門クリニックに行くわけです。患者さんも病院のスタッフさんもすべて女性です。検査で病院を訪れると、男性は私とドクターだけです。少しずつ慣れはするものの、やっぱりちょっと恥ずかしい気持ちはあります。一度定期検査に妻と娘と行ったことがあります。僕と妻がいる中で、検査で呼ばれて入るのが男性の僕というのは自分で考えても笑えました。東京のドクターは乳がん専門で長期に渡り研究されている名医で、何よりとても明るく愛のある素晴らしい方です。手術もそうですが、検査でも信頼のできるドクターと巡り会えたのはとても感謝なことです。

ガンになって不利になること

ガンになって不利になったことが一つだけあります。それは、生命保険に入れないことです。通常治療を終えて治癒（正確には治癒ではなく、ドクターから再発の可能性が低いと判断された時）になってから5年経過しないと入れません。僕は2018年8月に、再発の可能性が低いということが言われたので、2018年から5年後の2023年によく生命保険に加入することができます。2021年現在妻と6歳と3歳の娘の4人暮らしです。僕に万が一のことがあっても保険金は支払われません。保険に入っていないからです。また、学資保険も僕名義では加入できません。妻名義にするか、地道に貯金をするかしかありません。保険は確率論なので、死ぬ可能性が高ければ加入させないか、保険会社が損しない範囲の保険金をもらって運営します。商売なのでしょうがないです。

そのような意味で保険に頼ることができませんが、僕たち夫婦は命もお金も神様が担ってくださっていると委ねているので、何の心配もなく暮らしています。子どもたちには、貧しくてもいつも喜んで生活できるような心を育てていきたいと思っています。保険に入れたとしても、今の生活では国民健康保険を払うのもきつい状態なのでどっちみち払えません（苦笑）

恵み

ガンになったことで、自分の人生に真剣に向き合えるようになりました。また、ガンになったときは一人でしたが、奇跡的な神様の導きによって妻と結婚し2人の娘もいます。今は僕の人生ではなく、家族の人生を生き、神様から作られたその目的のために生きています。毎日妻や子どもたちと会えるのが最後かもしれないと本気で思うようにしています。ガンだけではなく、死は神様の時に突然にやってくるからです。だから、愛をきちんと伝え、一日の終わりには生かされたことに感謝をし、朝目覚めた時に目覚めた感謝をしています。こんなことはガンになっていなければ訪れなかった恵みです。当たり前生まれ、当たり前成長し、当たり前生きる。それが当たり前じゃないと聞いてはきたけれど、実際にそれを目の当たりにし、自分事になった時に人はそれを知ることができるのですね。ずっと健康だったら、この恵みすらわからず生きていた人生だったのかもしれない。

あとがき

最後までお読みいただき、ありがとうございました!僕のガンは超初期なので、大変な思いをしながらガン治療をされている方と比べれば大したことないことです。経験談として書く必要のないものだったかもしれません。しかし、もし僕が病院に行っていなければ、リンパ経由で早い段階で全身に転移していた可能性が高いです。また、はじめの病院で治療を受けていれば全摘の可能性があり、また病院やドクターとも信頼関係が無いまま治療をしていたと思います。決して大学病院を批判しているのではなく、信頼関係が大切であることと、患者には病院やドクターを選ぶ権利があるということを知っていただける機会かとも思い、思い切って書いてみました。そして何より、僕自身一度は「ガンで死んでしまう」と本気で思いました。だから、この経験は多くの人ではなく、同じような状況にいるどこかの誰かの役には立つのではないかと思い書きました。なぜなら、一番伝えたいことは、「はじめに」でも書きましたが、ガンってそんなに悪いもんじゃないからです。僕にとってはガンが祝福の始まりだったからです。

僕は幼少期から裕福な家庭で育ちました。そして、いつからか人を馬鹿にしたり、差別したりするようになっていきました。20代になると、人の評価がどれだけお金を持っているか、どれだけビジネスで成功しているかという視点だけになり、いつか自分もお金持ちになって有名になりたいと思うようになりました。お金がいくらあったも足りませんでした。だから、睡眠時間を削って、外食やコンビニ弁当で食事を済ませながら働き続けました。全て

は自分の成功のためでした。大事なものを見失っていった気がします。何のために生まれ、何のために生かされているのか。神様は確かに僕を母の胎の中で造り、心臓の鼓動をずっと休まず動かしてくださっています。そこには造られた目的があるからです。その目的から大きく外れ、自己中心の生き方になった僕は、神様から愛の往復ビンタをくらったのだと思います。ガンは愛です。「僕の命は僕のものではなく、神様のもの。人生も神様のもの。だから神様生かしてくださるなら、神様に僕の人生を捧げます。」そのように神様に宣言し、今の僕の人生があります。家族4人で暮らしながらも収入は独身時代の4分の1。お金の面を考えれば、生活するので精一杯。でも、自分で生きているのではなく、神様が養ってくださっているという恵みと祝福の中でいつも感謝と喜びをもって生きているのは、お金に代えがたい尊いものです。僕がもし病院に行っていなければ、なかったはずの人生、僕がもし病院に行っていなければ生まれていなかった子どもたち、なかった家族、愛する妻。今僕は神様が造ったその人生をやっと歩み始めたのだと思います。与えられた残りの人生、天国を考えれば永遠の中の一瞬のこの人生を走っていきたいと思います。私たち人を造った神様は、私たち一人ひとりに特別な試練を与えてくださいます。それは愛が故の祝福の始まりです。そしてそれは、僕だけではなく今これを読んでいるあなたにもあるかもしれません。自分が生まれてきた目的、そこに立ち返り、この地上での命をしっかりと全うしていきましょう。これを読んでもくださったすべての方々に祝福がありますように！

「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」(新約聖書コリント人への手紙第一 10章13節)

著者プロフィール

黒川 康敬(くろかわ やすのり)

牧師・神学生

キャリアカウンセラー(CDA)

1980年茨城県水戸市で生まれる。家庭の事情により高校卒業後に独立。アルバイトと奨学金で生計を立て大学卒業。環境の変化と経済的ダメージにより、大学在学中に非行に走り夜遊びに目覚める。飲酒・タバコ・ナンパを繰り返し、この頃から将来は金持ちの成功者となることを唯一の目標とする。その後、サラリーマンとして働く傍ら、副業を重ねお金と成功を夢見て自己啓発と自己投資に明け暮れる。2011年更なる成功を目指し独立後、全財産を失い銀行口座が差し押さえられる。更に翌年男性乳がんとなり人生のどん底となる。それを機に一時通っていた教会に戻り回心。それまでの自己中心を悔い改め、残りの人生を福音宣教へ捧げると宣言。33歳で結婚に導かれ、東京基督教大学教会教職課程入学。同過程前期を修了し、実習先である東京都足立区神の家族主イエス・キリスト教会の伝道師に就任。2019年、神様の召しにより家族帯同でCFNI(クライストフォーザネイションズ)に留学。2020年に卒業し、牧師按手を受ける。帰国後は福島県南相馬市に移住し、復興支援と宣教活動をスタート予定。特に、シングルマザーで育った妻Kiiと共に、「どんな家庭環境で育った人でも、自分の代で幸せな家族形成が出来る」というクリスチャンホームのモデルとな

り、それを広めることを実践しながら宣教を前進させたいと願っている。

▼テレビ東京「生きるを伝える」出演動画

<https://youtu.be/p-CSu9YcIso>

▼ブログ「留学家族」

<http://kroj.jp/>

▼SNS

-[Facebook](#)

-[Twitter](#)

-[Instagram](#)

-[YouTube](#)

奥付

2018年10月16日発行 初版

著者:黒川康敬

表紙デザイン:デザイン工房午後3:30

<https://gogosanjihan.com>

Copyright(C)2018 Yasunori Kurokawa All Rights Reserved.

32歳僕が 男性 乳がんは なりました。

黒川康敬
KUROKAWA YASUNORI



ガンによって
人生はどのように
変えられたのか。

実際あった
リアルなガン告知や
セカンドオピニオン、
男性だからこそその
気持ちを
余すことなく掲載。

若くして男性乳がんになった男の
ノンフィクションすったもんだブログが

電子書籍化!

